

英語資格・検定試験を大学入試で活用する目安は

河合塾

2025/10/30

総合型・学校推薦型選抜のみならず、一般選抜でも英語資格・検定試験を利用することはできる。ここでは2026年度一般選抜における英語資格・検定試験の利用状況を例に、どのレベルまで取得すれば入試で活用できるのかなどをみていく。

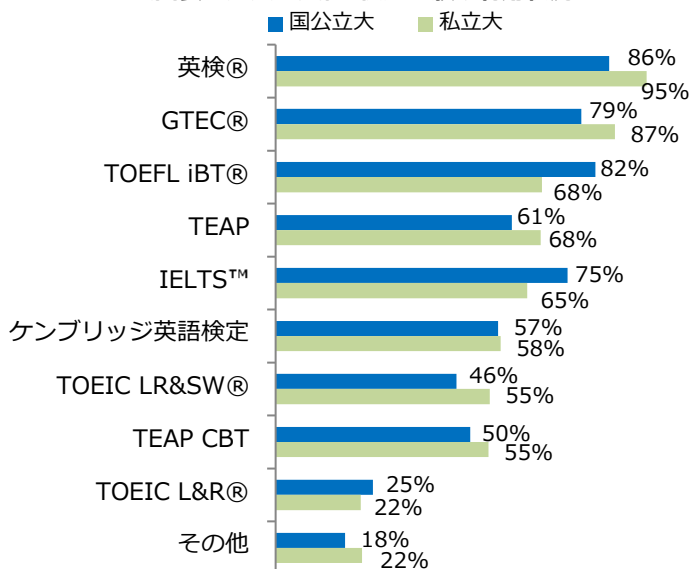
①各試験の利用状況

2026年度入試において英語資格・検定試験を利用する大学は、国公立大で28校と全体の16%と少数派である一方、私立大では320校と半数以上の大学で利用可能であり、また利用大は増加傾向にある。国公立大と私立大で大きな差があるのは理由がある。国公立大の一般選抜は大半が1方式であるため、導入すると受験者全員が対象になり影響が大きい。一方、私立大は複数ある方式の1つとして英語資格・検定試験を利用できる入試方式を持つことが多く、導入しやすい。私立大では半数以上の大学が利用しているとはいえ、必ずしも英語資格・検定試験の級・スコアを持っていなくても受験できるケースがほとんどである。

英語資格・検定試験の利用方法は「出願要件」のほか、「合否判定」に利用するものがある。「合否判定」利用の具体を挙げると、成績に応じて英語など特定の教科の得点に置き換える、当日の得点に加点するといったものがある。その場合、提出は任意とする大学も多い。利用方法は大学のみならず、学部・方式により異なる。

では、どの試験がよく使われているのだろうか。＜図表1＞は日本で受検できる主な英語資格・検定試験について、利用できる大学の割合をまとめたものだ。実用英語技能検定（英検®）は国公立大、私立大ともに約9割の大学で利用可能となっている。以下、利用できる大学が多い順にGTEC®、TOEFL iBT®、TEAP、IELTS™、ケンブリッジ英語検定、TOEIC LR&SW®、TEAP CBT、TOEIC L&R®、その他。

＜図表1＞英語資格・検定試験の利用状況



※河合塾調べ 1大学で1学部・方式で利用できれば利用できる試験とした

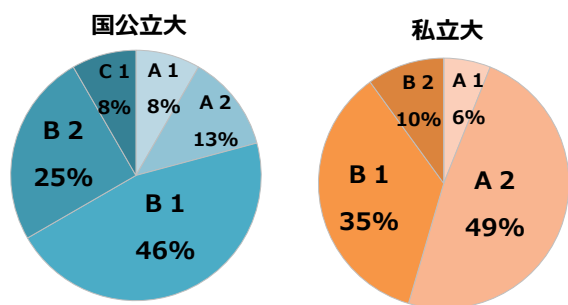
②必要となるCEFRレベルの目安

次にどのレベルまで取得すれば入試で活用できるのかをみていく。＜図表2＞は、英語資格・検定試験を活用する大学が指定する級・スコアをCEFRレベルに置き換えてみたものである。

CEFR（セファール）とは母国語でない言語の運用能力をA1からC2までの6段階で評価する国際的な指標で、各英語資格・検定試験の級・スコアをCEFRレベルに当てはめることで試験ごとの比較が可能となる。レベルの目安を英検®を例にみていくと、概ねC1:1級合格、B2:準1級合格、B1:2級合格、A2:準2級合格、A1:3級合格となる。

国公立大ではB1が必要な大学が46%と最も多くなっており、その上のB2が必要な大学も25%を占める。私立大ではA2が約半数、続いてB1が35%と、国公立大よりやや易しめといえそう。A2が取得できれば、受験できる試験の幅が広がると言える。もちろん大学・学部により求めるレベルは異なるので、こちらも確認が必要である。

＜図表2＞必要となるCEFRレベル



※河合塾調べ 大学内で学部または方式によりレベルが異なる場合、最多のレベルを採用した

※各大学の利用状況は入試情報サイトKei-Net「2026年度入試 英語資格・検定試験利用状況」にて掲載中
[最新入試情報](#) | [大学入試情報](#) | [河合塾 Kei-Net](#)